家庭や地域社会と積極的にかかわるボランティア活動

秋田県立西仙北高等学校

◎　はじめに

本校は、昭和40年４月に未来の郷土づくりの担い手を育成するという地域住民の熱い思いが実って開校した、比較的新しい学校である。

学校の所在する西仙北町は、県南部の穀倉地帯仙北平野の西に位置し、農業を基幹産業とする人口１万１千人弱の小さな町である。近年、全県的な傾向と同じく人口が流出し、さらには少子・高齢化(高齢化率30.1%)が急速に進行し、解決すべき課題も多い。

こうしたことから、地域社会の学校に寄せる期待も大きいものがある。

１　取り組みのねらい

校訓である「友愛」(互いに親切と思いやりを尽くし、人格の尊さと真の協力の美しさを知る)の精神を柱としてボランティア活動を展開し、豊かな人間性をはぐくむ。

(1) 生徒全員がボランティア活動を体験することによってボランティア活動への動機付けをする。

(2) 高齢者をはじめ、様々な人たちとの触れ合い体験活動を通して、共に生きていくことの大切さについて考え、そのための実践力を身に付けさせる。

(3) 近隣の福祉施設等での地域に根ざした活動を通して、連帯感と社会規範意識を養う。

(4) 自己の生き方を見つめ、自己実現を図り、自己の進路に向かって力強く生きようとする豊かな心を育てる。

２　教育課程上の位置付け

各学年の福祉や環境に関する課題解決に迫る「総合的な学習の時間」、教科「家庭」での「食物」や「家庭看護・福祉」の学習時間に位置付け、ねらいに沿った活動を展開している。

３　活動の概要

(1) 花いっぱい運動

全校生徒が600本のベコニアの花苗を200個のプランターに移植した。「日ごろお世話になっている地域の人たちにも喜んでもらいたい」という生徒たちの声を受けて、１年生は校舎前庭と国道13号線バイパス十字路に、２年生は町役場と高齢者ふれあいセンターに、３年生は神岡町の特別養護老人ホーム「愛幸園」と協和町の「峰山荘」、ＪＲ刈和野駅にプランターを設置した。

花苗移植作業を終えた後、県生活環境部のふるさと美化推進チームから応援に駆けつけてくださった３名の方々の「公園のように美しいふるさと秋田」を目指そうという励ましの言葉を得て、全校生徒が学校周辺やＪＲ刈和野駅、通学路の清掃を行う「さわやかクリーンアップ作戦」を展開した。

［駅構内での花苗移植作業］

(2) 駅清掃奉仕活動

多くの生徒たちが通学に利用しているＪＲ刈和野駅や通路、駅前広場のゴミの散乱は見た目にも好ましくない状況にあった。とりわけゴミや空き缶のポイ捨ては目に余るものがあった。そうした中、女子生徒数名から自分たちの手で環境美化のためにが

んばろうという声が持ち上がった。

福祉コースでの授業やＨＲ活動を通して、「勤労・奉仕」、「思いやり」、「郷土愛」について取り上げ、意識を高める工夫をした。生徒たちが進んで取り組みたい奉仕活動として、駅ホーム待合室の窓ふき、トイレの清掃、線路沿いの空き地での花壇を作り除草、水やり等の管理をするなどがあった。「言われたからやる。」というものではなく、「自分たちの問題として取り組むのだ。」というやる気を大切にし、教師たちもそれぞれのグループに入って、共に汗して働くことを体験した。見違えるほどきれいになった駅構内を見た生徒たちは誇らしげであった。

(3) 一人暮らし高齢者宅訪問

この活動は、老人福祉施設での奉仕体験を終えた後、「家族と離れて生活しているお年寄りが淋しい思いをしていることがわかった。しかし、もっと淋しい思いをしているのは、たった一人で家の中で暮らしているお年寄りたちではないか。そうした人たちの役に立つような活動もしてみたい」という生徒の感想がきっかけとなっている。

［一人暮らし高齢者宅訪問］

一人暮らし高齢者６世帯を、３年生がグループを組み、町の児童民生委員、ヘルパー、福祉専門員の支援を得て訪問した。買い物、部屋の掃除、夕食の準備などをし、夜は高齢者の話に耳を傾け、自分たちの高校生活、進路、家族についてくつろいだ話をするなどして交流を深めた。

(4) まごころ福祉弁当づくり

町の社会福祉協議会では、昭和54年から、65歳以上で一人暮らしをしているお年寄りを対象に、月３回の「福祉弁当」のサービスを町内の女性ボランティアの手で実施している。県内でも取り組みは早い方で、息の長い活動は他の市町村の模範となっているほどである。

この活動に、平成４年の夏休みに７名の生徒が自主的に参加したことがきっかけとなって、平成５年度からは食物の授業に位置付るようになり、その後も「まごころ福祉弁当作り」として継続して実施している。このことにより、月３回のサービスが４回へと拡大された。

［「まごころ福祉弁当」づくり］

福祉コースを選択している２年生が、「年齢・栄養」の単元で、老人食の学習時間に献立表を作成し、これをもとに３年生が調理実習の時間に調理を担当する。高校生が力を合わせ、心をこめて作り上げ、40食もの「福祉弁当」は、町の車２台に載せて、一人暮らしのお年寄りのもとに届けられる。必要経費は、町の社会福祉協議会で負担している。

(5) 県境を越えた福祉体験交流会

平成８年度、岩手県北上地方振興局が地域活性化事業として企画した「岩手・秋田高校生ボランティア体験交流会」の対象となったのが、本校と岩手県立西和賀高校である。この活動は、湯田町と西仙北町の社会福祉協議会も共催している。

本年度は８月に、本校の生徒が西和賀高校を訪問した。カヌーでの川くだり自然体験の後、特別養護老人ホームでのおむつたたみなどの介護実習、さらに福祉施設では施設

の清掃、一緒になっての封筒作り、ラベル貼りなどの共同作業体験をした。

１月には、西和賀高校の生徒が本校を訪問した。１日目は、保育園での保育体験、特別養護老人ホームや身体障害者福祉施設での介護体験、ミニディサービスでの車椅子ダンス教室などに参加した。２日目は、町内の一人暮らし高齢者世帯の除雪ボランティアを体験するなどして、生徒同士さらには多くの地域の人たちと触れ合った。

［一人暮らし高齢者宅での除雪作業］

また、西和賀高校では平成５年度から、「海外福祉派遣事業」を実施しているが、この交流活動がきっかけとなり、平成10年度からは本校の生徒も一緒に研修に参加するようになった。本年度は、福祉国家と言われ「寝たきり老人をつくらない」をモットーにしているデンマークのコペンハーゲンやボーゲンセ、ソノスーなどの各市に西和賀高校の生徒とともに６名が、１月５日から10日間の日程で滞在し、障害のある住民の自宅や福祉施設を訪問して研修を深めた。

４　活動の評価方法

アンケート調査、活動に参加した生徒の感想、地域住民からのお便りなどの反応によって、体験活動の評価をしている。

(1) アンケート調査結果から

①　ボランティア活動のイメージ　・人と人とが触れ合う活動　1年80.0%　2年57.1%　3年81.8%　・自分を成長させる　1年17.2%　2年28.5%　3年13.6%

②　ボランティア活動への取り組み　・積極的　1年71.4%　2年71.4%　3年90.9%

③　ボランティア活動に対するこれからの取り組み　・積極的に取り組みたい　１年40.0%　2年85.7%　3年90.9%

(2) 生徒の感想

・　プランターに花をポン、ポン、ポンと素早くかつ丁寧に３個植える。２.プランターをバイパス等に華麗にセットする。３.ポイ捨てされているゴミを拾うこの三つの活動は、環境をきれいにするだけでなく、活動に参加した人の心もきれいにします。事実、僕はこの日の下校中、ゴミが落ちていたので拾って帰りました。今まで全然無関心でいた人が、これまでになる活動はないと思います。（１年男子生徒）

・　植えた花は、その後の管理も大切である。天候に合わせての水やり、成長に見合った追肥などが必要である『生命』ある花を、その美しさをより一層輝かせて咲かせ続けるには、気持ちが日ごろからプランターに向いていなければならないことを学びました。（２年女子生徒）

・　ともすれば、理解し得ない年代であるという意識でお年寄りを見がちな僕たちでした。しかしこの訪問体験活動を通し、とても身近な存在であると感じとることができました。（３年男子生徒）

(3) 地域の人たちの声

・　身内だけの力では、どうしてもこんなに家内を緊張させたり、期待感をもたせたり涙ぐむほどの感動を与えたりすることはありませんでした。寝たきりの病人の一日の生活の中で、このように心を動かすことはないのです。生きる力になっていくものと思います。人の命の尊さを具体的行動によって学びとらせる西仙北高等学校の福祉体験活動に敬服いたしております（寝たきりの老妻を抱える夫）

・　福祉弁当、有難う。うまい・・うまいと、頬をふくらませてウウ‥‥食べています。○○君、生きているうちに？一度高校生の皆さんにお会いしたい！『一人住む老いに

届けん弁当を温きうちにと車走らす』ご健闘を祈ります。（一人暮らしの高齢者）

5　学校支援委員会の組織・運営

西仙北町社会福祉協議会コーディネター、神岡町特別養護老人ホーム園長、協和町特別養護老人ホーム施設長からなる学校支援委員会を組織し、活動内容や時間帯、生徒の受け入れ体制等について協議・連絡し合い、互いのメリットを確認しつつ活動を展開してきた。

また、教頭をキャップとし、家庭科教員や各分掌の主任12名からなる校内体験活動推進委員会を組織し、活動のねらい、活動内容、活動時期、生徒の参加体制、各学年部との連絡調整等について協議し、全職員の共通理解を図り、活動がスムーズに展開できるようにした。

6　推進地域としての取り組み

町教育委員会が中心となり、小学校４校、中学校２校、高校１校の担当者さらには関係機関・団体等によって構成される「豊かな体験活動推進協議会」を開催し、各推進校の取組みにかかわる情報の交換や小・中・高校連携活動などについて協議した。

本年度は、国の重要無形民族文化財に指定されている「刈和野の大綱引き」の綱作り作業を、小・中・高校の児童・生徒が一同に会して実施することにした。この活動は１月31日に、作業責任者とも言うべき建元＜たてもと＞の指示で進められた。

7　活動の成果と今後の課題

(1) 成果

①　世代を越えた交流、学校間交流など様々な人々と触れ合う中で、地域への理解・関心が高まり、社会貢献のあり方、自他の権利の尊重、人としてのふるまい方等を学びとることができた。

②　多少の困難にもめげることなくやり遂げたという、成就感、充実感、満足感を得たことは、自分自身への誇り、自己有用感を生み出すことにつながり、生きていることへの積極的な姿勢が見られるようになった。

③　多くの直接体験を積むことによって、自然や社会さらには人々への興味・関心が高まり、よりよい生活を創り出すために、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動しようとする「生きる力」の基盤となるものを培うことができた。

(2) 課題

①　福祉体験活動をさらに充実・発展させ、生徒の中から地域のボランティア活動を担うリーダーが育っていくようにしたい。

②　活動の意義を理解しつつも、全ての生徒が意欲的・積極的にかかわっているとはいえない。意欲的・積極的に参加させるための創意・工夫を図っていくようにしたい。

③　学校外の施設等での活動は、事故に結びつきやすい場面が多い。注意や対策を万全にするとともに、移動手段の確保を容易にしたい。

◎　おわりに

貴重な数々の体験活動の中で、「新しい自分を発見」した生徒、「心動かされた」地域の人たちを見ることができた。ボランティア活動の輪の広がりを期待したい。

［生徒が製作した大綱引きの壁画］